

鎌倉ノートからみた「琉球芸術調査」

久貝 典子

はじめに

沖縄県立芸術大学附属図書・資料館は、鎌倉芳太郎ノート資料（以下「鎌倉ノート」「ノート」と表記する）という全81冊の重要文化財に指定された資料を所蔵している。

同資料は2007年まで故鎌倉芳太郎先生本人及びご遺族より4度にわたり寄贈されたものであり、波照間永吉氏によると「重要文化財に指定されたガラス乾板1229点・台紙付紙焼き写真851点・調査ノート81点を筆頭に、写真資料（紙焼き写真）2952点、文書資料（原稿・筆写本・他）178点、紅型資料（型紙・他）2154点、陶磁器資料67点で、その総数は7512点という膨大なもの」である（『鎌倉芳太郎資料「文書資料」目録』の刊行に寄せて『鎌倉芳太郎資料「文書資料」目録』P1 沖縄県立芸術大学附属研究所：2014）。

沖縄県立芸術大学に寄贈された鎌倉芳太郎資料（以下「鎌倉資料」と略記する）は、1998年以降より現在に至るまで、同大附属研究所が中心となって資料集全4冊、目録2冊等が刊行されている。同事業をスタートさせた趣旨は、鎌倉資料の有する価値が「沖縄の芸術と文化の創造・研究に果たす役割には、無限のものがあるにちがいない」（波照間永吉「刊行にあたって」『鎌倉芳太郎資料集（ノート篇）第1巻 美術・工芸』）という大きな理由があるからである。

刊行事業の経過について、当時の附属研究所所長、波照間永吉氏は次のように説明した。

沖縄県立芸術大学附属研究所ではこれら（鎌倉）の資料の重要性と文化遺産の共有化という観点から、鎌倉資料の公開にむけて資料の整理・刊行事業を計画した。「鎌倉資料」は大きく「文献関係資料」「紅型型紙資料」「写真資料」の3つに分類されるが、本事業計画は、「文献関係資料」「紅型型紙資料」を編集刊行することを骨子としたものである。大学当局と県の関

係部局はこの計画にご理解を示してくれ、平成8年度より「沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館蔵『鎌倉芳太郎資料集』刊行事業」として開始された。その成果の一部はすでに『鎌倉芳太郎資料目録』（1998年）、『鎌倉芳太郎資料集 紅型型紙』1・2（2002・2003年）として公刊されている。つまり附属研究所は、2014年までに鎌倉資料を概観するための『鎌倉芳太郎資料目録』刊行、次いで資料集『紅型型紙』刊行、さらに「文献関係資料」の公開化に向けた『資料集』刊行という事業を遂行している（引用文中の（鎌倉）は筆者が付加した）。さらに、「写真資料」のデジタルアーカイブ化、『沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館所蔵 鎌倉芳太郎資料「文書資料」目録』（沖縄県立芸術大学附属研究所 2014）の刊行と事業を展開させているが、これらについては鎌倉芳太郎研究の項で再述する。

重要な「文献関係資料」である鎌倉ノートは、数字の羅列のみを追うと、鎌倉資料の総数7512点のうちのわずか81点にしか過ぎない。しかしノートは、鎌倉が行った琉球芸術調査そのものを記録したノート、コレクションの根幹を為す重要なノートである。何よりも、鎌倉ノートに収載された文字や絵図などの記録を手掛かりに首里城の復元事業¹、『歴代宝案』刊行²・浦添コンニャク型等数々の遺物の復元が行われるなど、失われた琉球・沖縄の文化遺産の復元事業の参考文献資料として不可欠な資料である。

鎌倉芳太郎の行った主要な琉球・沖縄の調査研究は、次の5度にわたって行われている。

第1期：大正10（1921）年4月-大正12（1923）年4月

沖縄県女子師範学校・沖縄県立第一高等女学校教諭として赴任した時期

第2期：大正13（1924）年5月-大正14（1925）年9月

第1回「琉球芸術調査事業」

第3期：大正15（1926）年4月-昭和3（1927）年9月

第2回「琉球芸術調査事業」

第4期：昭和6（1933）年8月

『歴代宝案』調査

第5期：昭和12（1937）年12月-昭和13（1938）年1月

浦添城址・首里城址・照屋城址ほかの調査

ノート81冊と特に関連が深いのは、1～3度までの来沖、すなわち第1期から始まり、第2～3期にわたって行われた「琉球芸術調査」事業までである。では、第4期の『歴代宝案』調査、第5期の各城址調査は第1～3期と関係がなかったかというところではなく、鎌倉芳太郎の『セレベス南海古陶瓷』を読むと、第1～3期の調査を手掛かりにして行われたことが理解できる。同書と「琉球芸術調査」の関連については後述することにして、本稿の目的は、ノート全冊に記入された日付をデータ化して得た結果を基に、第1～3期について行われた「琉球芸術調査」事業について理解をより深めることにある。そうすることが、鎌倉芳太郎の業績を把握する一助となるからである。

手順としては、ノートに記された日付をデータ集積し、データを基にノートの分類、特に成立年等の整理を行った。それらのデータをもとに、時間の経過とともに「琉球芸術調査」事業がどのように行われたかを分析し、同事業の業績について考察を試みた。

凡例

- ①本稿の資料作成の範囲は第1～3期までとする。
- ②資料は【表A】、【表B】…としてデータ化した。但し、本稿で言及する範囲は【表A】内で収まる。よって資料としては【表A】のみ掲載する。
- ③ノート81冊のうち、基本的には日付の記載があるノートのみデータ作成の対象とするが、日付のないノートで本稿で扱うべきと考えるものについては、例えば「ノート〇〇へツヅク」等、鎌倉によるメモが認められるもの等については、コンテクストから、または鎌倉の『琉球王家伝来衣裳』（講談社：1973）・『鎌倉芳太郎型絵染作品集』（講談社：1976）・『沖縄文化の遺宝』（岩波書店：1982）ほかの著作から前後関係が可能なもののみ取り扱うことにした。

なお『沖縄文化の遺宝』については文中で『遺宝』と略記する。

- ③各表の番号を具体的に示す必要がある場合は次の通りとする。

例：【表A】の13項目→【表A】13

- ④「鎌倉芳太郎ノート資料」の表記については、緒言で触れた「鎌倉ノート」「ノート」と省略表記するほか、本文中でノートの何番かを示すときには次のように表記する。また、具体的に頁数を示すときには次のように表す。

例：鎌倉ノートNo.1の61→〔1〕61。但し「61」に相当するのはマイクロフィルム番号である。

- ④琉球、沖縄の呼称については、明治期以前を「琉球」、大正期以後を「沖縄」と使用する研究者もいるが、本項では資料によってどちらも利用している場合があるので、どちらも使用する。
- ⑤「東京美術学校」の名称は、「美校」と省略する場合がある。
- ⑥敬称は略する。

I. 沖縄県立芸術大学附属図書・資料館所蔵のノート資料について

鎌倉芳太郎資料が沖縄県立芸術大学附属図書・資料館の所蔵となった経緯は、1972年2月6日から3月12日の間に、サントリー美術館・琉球政府立博物館共催の「50年前の沖縄一写真で見る失われた遺宝」が開催されたことが良い影響を与えたといえる。後でも述べるが、同展示会では、戦前の美しい沖縄各地の風景ほかを展示。沖縄県民に大きな衝撃を与え、多数の参観者が博物館を訪れた⁴。また、期間中は『沖縄タイムス』『琉球新報』2紙がニュースとして連日取り上げた。この成功が、鎌倉芳太郎の『沖縄文化の遺宝』（岩波書店）執筆の契機となり、沖縄県立芸術大学附属図書・資料館への鎌倉芳太郎資料受け入れに尽力した外間守善とを繋ぐことになった。『沖縄文化の遺宝』の編集担当者は高草茂（編集長）、本書の編集協力者に外間正幸、真栄平房敬、翁長良衣（写真）そして外間が名を連ねることとなった⁵。以下外間の言より当時の様子を記す⁶。

思えば、県立芸大がまだ影も形も見えなかったひこばえの頃、私は鎌倉先生が岩波書店から刊行する『沖縄文化の遺宝』の原稿の校閲や古文献の校合のための協力者として鎌倉先生の警咳に接する機会が頻繁だった。その折に拝見した鎌倉先生の沖縄研究写真資料（乾板）や70冊余の研究ノートに驚嘆したことは、『沖縄文化の遺宝』の末尾に記したのでここではくり返すまい。ただ、これらの鎌倉資料のすべてを購入したいという申し入れが、国立、公立、私立の大学や研究所、著名な美術館からあることを伺った私は、迷うことなくこれからできるであろう沖縄県立芸大に入れて欲しいとお願いをした。できてもない大学に、ということは実に乱暴だし、

冒険そのものだったのだが、鎌倉先生は10年近くの私との昵懇を前提にした上で、「外間さんにまかせる。写真乾板、紅型紙資料、その他は芸大に、研究ノートは長い間協力してくれた外間さん個人にあげたい」とおっしゃってくださいました。

ノートを含めた鎌倉芳太郎資料は、行政上の煩雑な手続きを済ませ、沖縄県立芸術大学附属図書・資料館へ移管される（第1次寄贈資料）。その後、2007年まで鎌倉家より計4回にわたる資料の寄贈があったのは既述のとおりである。以下、I-1項では鎌倉芳太郎研究、I-2項ではノート表題、I-3項ではデータ作成の結果として本章をまとめる。

I-1. 現在までの鎌倉芳太郎研究について

2014年、沖縄県立芸術大学附属研究所が中心となって行ってきた鎌倉芳太郎資料研究について、次の幾つかの成果が披露された。

1つは鎌倉資料所収の「文書資料」の全体像を明らかにしたいとの趣旨（波照間 2014:P1）で、同年3月30日、沖縄県立芸術大学附属研究所（以下「附属研究所」と略記する）より『鎌倉芳太郎資料「文書資料」目録』が刊行された。

2つめは鎌倉資料のビジュアル化を目標とする事業。こちらは、沖縄県立芸術大学教育研究支援資金を受け開始された「鎌倉芳太郎資料の調査・整理・記録」（2007）と、科学研究費補助金を受け開始された「鎌倉芳太郎資料の画像データベース構築・公開とその応用研究」（2007-2010）というデジタルアーカイブ化事業であった。研究代表者はどちらも波照間永吉となっている。

3つめは、鎌倉芳太郎資料の内訳—文献関係・写真・首里城復元関係・紅型・国宝指定その他—を公表し、これまでの研究を総括することを目的として同年5月20日（火）—6月22日（日）の会期で『沖縄県立博物館・美術館 美術館企画展「麗しき琉球の記憶—鎌倉芳太郎が発見した美—」』が開催されたことである。

これら3つの成果は、現在までの、資料整理・翻刻・資料集刊行といった基本的な鎌倉資料研究がほぼゴールに達し、活字・写真・ビジュアル画像などで一般の需要にこたえるという、次の段階に入ったことを意味する。

現在に至るまでの鎌倉芳太郎研究は、しかし、決して平坦な道程を歩んではない。戦禍から資料を守った鎌倉本人の努力、資料を沖縄県及び沖縄県立芸

術大学へ譲りうけるために尽力した人々、資料の公開に向け、日夜奮闘し続ける人々の存在があり、今日の成果へと続いたのである。本項では、鎌倉芳太郎資料を守り、沖縄文化研究の発展に寄与したこれらの人々の努力を振り返り、現在に至るまでの概観・整理を試みたい。

戦前

戦前の県内における鎌倉芳太郎の調査報告は、新聞紙上での発表が先行し、地元のジャーナリストに好意的に受け入れられている。例えば、「八重山芸術の世界的価値 近代芸術に於る新しき指針」は『沖縄タイムス』(1924)に全45回、「円覚寺壁画考」は『琉球新報』(1925)で4回掲載された。

大正10(1921)年発刊の『沖縄タイムス』は、鎌倉に琉球美術工芸の手ほどきをした末吉安恭が文化欄を担当していた。前後するが、末吉は大正4(1915)年には当真嗣合ほかの創刊した『沖縄朝日新聞』の記者をしていた。当時のジャーナリストは尚家ゆかりの者や元上層士族出身者が殆どであった。「手墨」(学問)の素養、東京等での留学経験をもつ者が多く、琉球の美術工芸品の独自性を評価する見識を備えていた。末吉もそのようなジャーナリストの一人で、『琉球新報』を創刊した尚順とも親交がある等、当時のメディアに人脈があった。末吉との連携が好機を引き寄せ、鎌倉に発表の場を与えた。鎌倉の琉球芸術・文化や歴史に関する報告は、有識者・ジャーナリストの強い関心と呼び、殆ど絶賛といってよいほど肯定的に受け入れられている。また、鎌倉にとっても各紙によって研究報告が周知され、一般に鎌倉の存在をアピールした重要な時期であるといえる。

1924年、鎌倉が首里城取壊をやめるよう伊東忠太へ働きかけ、伊東の尽力で首里城取壊中止が実現。鎌倉芳太郎・伊東忠太共同名義の「琉球芸術調査」が本格的に開始されると、鎌倉の研究活動に好意的だった有識者やジャーナリストが全面的に協力する。例えば、『沖縄朝日新聞』の「偉大なる琉球芸術の価値を世界に紹介する一啓明会の事業と鎌倉氏の努力」(1925年1月29日)においては、鎌倉の事業を①写真・拓本・模写・事物等芸術資料の収集、②東洋諸国の芸術との比較研究、③琉球文化史の作成等が目的であるとし、それらの研究をまとめ、啓明会から『琉球芸術大観』として刊行される予定であると紹介している。

第4期・昭和8（1933）年の『歴代宝案』研究、第5期・同12（1937）年の各城址研究については、戦争の影響もあり、県内に各紙資料が残っておらず継続調査中である。

戦後－1980年代

鎌倉は、戦後しばらくは沖縄を訪問していない。原因は諸々あるが、もっとも大きな理由としては鎌倉自身の戦後生活の立て直し、型絵染技法の確立や執筆活動等へ専念するなど、現実的な生活や芸術活動上の問題が関与していたためである（鎌倉 1976：P176）。

県内においては、米国軍政府が沖縄統治をより円滑に行う目的で琉球文化及び芸術活動を奨励する。昭和20（1945）年沖縄諮詢会が発足、文化部の下に芸術課が設置される（1947－1948）。芸術課では、芸術技官として県内の美術家を雇用（ジェンキンス・豊見山 2009：P90）、その一人に名渡山愛順がいた。名渡山は戦後沖縄の芸術復興・文化財保護・紅型復興に尽力した画家で、東京美術学校在学中に鎌倉の指導を受けている（鎌倉 1982：P280）。

昭和23（1948）年豊平良頭が中心となり『沖縄タイムス』を創刊、翌年創立1周年を記念し、「沖展」（沖縄美術展覧会）が開かれた。当初は工芸部門がなく、同部門は昭和29（1954）年に設置され、紅型復興に貢献することになる。

名渡山は昭和26（1951）年軍政府より第2回国民指導委員に任命され、米国視察の帰途鎌倉に直面、紅型型紙ほか寄贈の話を持ちかける。鎌倉はその話に応じ、昭和32（1957）年、紅型型紙・尚家伝来衣装・陶磁器・古文書等700点余を県へ返還した（鎌倉：1982：P280）。

同年は鎌倉自身も転機を迎え、紅型技法を用いた実作を行うようになる。紅型の実物大手彩色本『琉球紅型・第1集』（京都書院）を限定出版、昭和33（1958）年ブラッセル万国博覧会に限定再版した同書を出品する（窪美 2003：P95）。また、同年より日本伝統工芸展に「琉球紅型中山風景文長着」を出品、以後毎回出品する。著作も、昭和34（1959）年『古琉球型紙』全5冊（京都書院）と精力的に刊行している。

1960年代は高度経済成長と連動し、民芸ブームが起こる。日本民藝協会初期の同人と県内美術家との交流が再び活発化し、昭和37（1962）年沖縄民藝協会が発足、2年後には「第18回全国民藝大会」が那覇市で開かれた。

鎌倉は、昭和46（1971）年、戦後初めて沖縄を訪ねた。沖縄が日本復帰を控えた翌年（1972）年2月6日－3月12日の期間、『50年前の沖縄一写真でみる失われた遺宝一展』（琉球政府立博物館主催）と題した展示会が行われるが、これは戦前鎌倉が撮影した写真の大展示会で、琉球政府立博物館を会場とし、同館主催・サントリー美術館共催であった。かつての個性豊かで美しい沖縄の姿を鮮明に想起させる写真の数々は人々を熱狂させ、一種の社会現象となるほど大きな反響をよんだ。2月9日には鎌倉自身が講演を行い、入場者もトータルで20万人を数えた。同年9月、鎌倉は勲四等瑞宝章を受章している。

復帰後、鎌倉の写真その他、沖縄研究資料の重要性を認識し始めた識者により、鎌倉の諸活動について概観・考察を試みる動きが現れる。昭和48（1973）年4月、鎌倉は国より「重要無形文化財〈型絵染〉保持者認定」（人間国宝）を受ける。県内では首里城復元を願う識者によって「首里城復元期成会」が発足。三木建は同年『南島史学第2号』（南島史学会）に「鎌倉芳太郎 沖縄文化研究にささげた半世紀」と題し、文化研究としての鎌倉の「琉球芸術調査」について論じた。

戦前の鎌倉の八重山芸術研究を再評価しようという動きが石垣市であり、昭和52（1977）年10月20日－同月30日、石垣市立博物館主催の『鎌倉芳太郎関係資料（蔵元絵師の画稿）展』が同館で開催された。鎌倉は所蔵の蔵元絵師画稿の一部を同博物館に寄贈した。その経緯について、石垣博孝が「鎌倉芳太郎氏蔵〈八重山蔵元絵師の画稿〉寄贈までのこと」として『石垣市立八重山博物館館報 創刊号』（石垣市立博物館）で報告している。

昭和57（1982）年10月、『沖縄文化の遺宝』（岩波書店）が刊行され、外間守善が「『沖縄文化の遺宝』と鎌倉ノート」と題して跋文を寄せ（PP281-285）、鎌倉ノートの存在をアピールした。

同書は首里城復元に関する大発見を幾つかもたらす。まず『百浦添御殿普請付御絵図并御材木寸法記』（1768）が見出され、沖縄県立芸術大学所蔵の鎌倉資料の中に、前掲資料に加筆して模写された同表題のノート・『図帳〈勢頭方〉』・『図帳〈当方〉』が発見されたのである。首里城復元は昭和61（1986）年「首里城正殿基本設計委員会」発足とともに復元作業が本格化。鎌倉資料は復元関連資料として大いに活用された。復元事業は正殿ほか主要区域を平成4（1992）

年竣工、一般へ開放した。

鎌倉は昭和58（1983）年1月伊波普猷賞受賞後の同年8月に逝去した。鎌倉の収集した画稿は全て石垣市へ寄贈され、没後の翌年（1984）石垣市名誉市民となっている。

岩波書店『文学』では、幾度かに渡って鎌倉芳太郎の特集を組んでいる。昭和59（1984）年の第52巻（第6号）では中村哲「鎌倉芳太郎『沖縄文化の遺宝』読後」、宮城篤正「鎌倉芳太郎先生の琉球芸術調査のことなど」として寄稿。

前述したが、沖縄県立芸術大学附属図書・資料館への鎌倉芳太郎資料受け入れに外間守善が尽力したことにより、昭和61（1986）年、附属研究所に開学記念として鎌倉の1次資料が寄贈される。以下附属研究所では4次にわたり、ガラス乾板1229点、台紙付紙焼き写真851点、調査ノート81点、写真資料（紙焼き）2952点、文書資料（原稿・筆写本・他）178点、紅型資料（型紙・他）2154点、陶磁器資料67点、総数7512点の寄贈を受けた。

鎌倉の書簡に関しては、戦前伊波普猷と交わした書簡が『伊波普猷全集第11巻』（平凡社 1974：P313）に所収されているのみとなっていたが、加藤信一は「鎌倉芳太郎書簡」（1）と（2）をそれぞれ『新潟大学教育学部紀要 第29巻第2号 人文・社会科学編』（1987）・『新潟大学教育学部紀要 第30巻第1号 人文・社会科学編』（1987）に掲載した。

1990年代－現在

この時期は、既述した沖縄県立芸術大学への鎌倉芳太郎資料の寄贈に関し、幾つかの方向で鎌倉芳太郎研究が進展をみせる。一つは首里城公園基本計画案への情報提供である。首里城復元事業には、同研究所の協力が不可欠だった。次に、附属研究所で行われた鎌倉芳太郎研究とその成果として論文や刊行物がでたことである。この時期は附属研究所のこれまでの業績を軸に鎌倉芳太郎に関する論考や著作を概観する。

平成10（1998）年、寄贈された鎌倉資料の分類・整理を目的とした『鎌倉芳太郎資料目録』（附属研究所）が刊行される。波照間永吉は、同年「鎌倉芳太郎が集めた沖縄関係文献資料」を『文学』第9巻第3号（岩波書店）で発表、『鎌倉芳太郎資料目録』を刊行した経緯や鎌倉資料の分類・整理・重要性について解説した。また同年三木建はアンソロジー『沖縄ひと紀行』（ニライ社）にお

いて「鎌倉芳太郎 沖縄文化研究にささげた半世紀」を担当、鎌倉の業績紹介を行った。

平成11（1999）年3月、原田あゆみは「鎌倉芳太郎の前期琉球芸術調査と美術観の変遷」と題し、沖縄県立芸術大学附属研究所紀要『沖縄芸術の科学 第11号』で沖縄文化の研究者であり芸術家である鎌倉の、5期にわたる沖縄研究について初めて言及した。

平成14（2002）年3月・翌年3月には、鎌倉芳太郎資料集全6巻予定のうち『鎌倉芳太郎資料集 第1巻 紅字型紙（1）』・『鎌倉芳太郎資料集 第1巻 紅字型紙（2）』が柳悦州を編集長とし、豊見山愛・平田美奈子の協力で発刊される。また平成15（2003）年11月には11月1日（土）－30日（日）の会期で「琉球の至宝と型絵染 一人間国宝 鎌倉芳太郎の全仕事」と題した企画展が香川県文化会館で開かれ（香川県文化会館・香川県教育委員会主催）、同名の図録を刊行、会期中に波照間永吉が講演を行った。また同月、久貝典子が「鎌倉芳太郎の琉球芸術調査（上）」と題し、鎌倉の行った「琉球芸術調査」に焦点をあてた論考を『沖縄文化沖縄文化 第96号（第38巻2号）』（『沖縄文化』編集所）に掲載。翌年3月に続編の「鎌倉芳太郎の琉球芸術調査（下）」を発表する。

平成16（2004）年3月、鎌倉ノートの翻刻に注釈を加え、附属研究所の波照間永吉を編集長とし田場由美雄ほかが編集協力した鎌倉資料集の3冊め『鎌倉芳太郎資料集（ノート篇）第1巻 美術・工芸』が同研究所より刊行される。ほぼ同時期に出版された沖縄県立芸術大学附属研究所紀要『沖縄芸術の科学』16号には、斎藤郁子が「鎌倉芳太郎ノート」記載文献資料について」と題し、鎌倉ノートの一次資料に注目した論考を発表。同年11月、波照間永吉が「鎌倉芳太郎と沖縄資料」（上）（下）と題した論考を『沖縄タイムス』（11月2－3日）に寄せた。

平成17（2005）年6月、鎌倉資料が国の重要文化財指定を受ける。指定名称は佐々木利和によると、次の通りである（佐々木 2014:P16）。

「琉球芸術調査写真 鎌倉芳太郎撮影

- 一 ガラス原版 1229枚、
- 一 紙焼付写真 851枚、

附調査記録 81冊」

平成18（2006）年3月には鎌倉資料集4冊めの『鎌倉芳太郎資料集（ノート篇）第2巻 民俗・宗教』が同じく波照間編集長ほかの協力で刊行。

平成19（2007）年2月、朝日新聞社より『型絵染 稲垣念次郎 鎌倉芳太郎』人間国宝37が刊行される。また同年、ご遺族のご厚意により、以下の4度めの寄贈があった。

文字資料 22点・染織資料139点・陶磁器資料67点・写真資料256点

前年、民族藝術学会で鎌倉の紅型研究について久貝典子が言及した「紅型を通してみた鎌倉芳太郎の琉球工芸観」が同年3月の『民族藝術』第23号に掲載。栗国恭子は「近代沖縄の芸術研究①—末吉安恭（麦門冬）と鎌倉芳太郎」と題し、近代の沖縄文化研究に大きな影響を与え、博覧強記の人と一目置かれながら事故死した麦門冬と鎌倉の親交について考察した。

平成20（2008）年の沖縄県立芸術大学附属研究所紀要『沖縄芸術の科学』20号（附属研究所）は鎌倉特集号で、『沖縄文化の遺宝』刊行事業を行い、当時岩波文庫の編集長であった高草茂が鎌倉資料寄贈の経緯に焦点をあてた論考「沖縄県立芸術大学に収蔵の鎌倉資料—その経緯」を発表。栗国恭子は昨年の特編で論考「近代沖縄の芸術研究①—鎌倉芳太郎と比嘉朝健・琉球芸術研究の光と影—」を寄せた。

平成21（2009）年、同紀要第21号は前掲の第4次寄贈資料の寄贈を受け開始された「平成19（2007）年度沖縄県立芸術大学教育研究支援資金」プロジェクトについての成果報告「鎌倉芳太郎の調査・整理・記録」を掲載した。各班担当者は以下の通りである。

文字資料班：波照間永吉（リーダー）・波平八郎・喜屋武盛也・久貝典子
染織資料班：柳悦州（サブリーダー）・小倉美佐・祝嶺恭子・平田美奈子
陶磁器資料班：島袋常秀・安里進

写真資料班：久万田晋（サブリーダー）・栗国恭子

同プロジェクト進行中鎌倉資料の「整理—保存—研究」という新たな課題が見出され、これまでの資料整理・研究という枠組みをさらに拡大する段階に入ったことが確認された。

平成23（2011）年の沖縄県立芸術大学附属研究所紀要『沖縄芸術の科学』23号（附属研究所）では、山田葉子が「鎌倉芳太郎資料より「琉球絵画資料一覧

表」を公表、鎌倉の調査した琉球絵画について言及した。

平成24（2012）年3月に刊行された沖縄県立芸術大学附属研究所紀要『沖縄芸術の科学』24号（附属研究所）では、鎌倉芳太郎と同じく琉球美術工芸調査を行った柳宗悦・民芸同人との比較研究を念頭に置いた論考を久貝典子が「柳宗悦の「琉球行」をめぐる―鎌倉芳太郎の「琉球芸術調査」との比較を前提にして―」と題し発表。またライターのと那原恵は2010年『ちくま』第476―490号で15回にわたって連載した「沖縄の光を残した人・鎌倉芳太郎伝」をまとめ、2013年7月初の鎌倉芳太郎自伝『首里城への坂道』を筑摩書房から刊行した。

平成26（2014）年現在までの鎌倉研究で特筆すべきことは、本項「はじめに」で既述した通りである。鎌倉の研究が活字・写真・ビジュアル画像などの分野で次のステップを踏んだ現在、様々な角度から鎌倉研究を応用することが可能となりつつある。鎌倉が、狂ったように日夜研究に没頭した、と語っていた努力はしっかりと受け取められ、沖縄の歴史や文化研究、文化財復興のフィールドで、ひこばえから大木へと成長しつつある。

I-2. 鎌倉ノート表題による分類

鎌倉ノート表題を列挙し一覧にする。

一覧は、鎌倉研究の資料として作成したものに、『鎌倉芳太郎資料目録』（附属研究所 1998）所収の「鎌倉芳太郎ノート目録」を参照し、在学中に作成したものである。なお、「鎌倉芳太郎ノート目録」（附属研究所 1998）は旧ノート番号14の前に33が移動して14となり、旧ノート番号14以下の番号が1つずつずれていく等の問題がある。しかし本項では、各ノートの中に記入されている年月日のデータベース化が目的なので、ここでは各ノート番号を、年月日が記載された各箱番号のようなものとする。

1. 美術 彫刻
2. 美術 絵画
3. 工芸 陶工
4. 工芸 雑工 金工
- 5 A. 美術 紋様

- 5 B. 工芸 陶磁工
6. 工芸 染織工1 附 縫工
7. 工芸 染織工2
8. 工芸 染色工3
9. 工芸 染織工 (久米島之部) A
10. 工芸 染織工 (久米島之部) B
11. 工芸 染織工 (久米島之部) C
12. 工芸 染織工 (宮古島之部) A
13. 北部神座考
14. 原本 琉球国由来記寺社坤 (聖) 工芸 染織工1 附 縫工
15. 聞得大君加那志御新下日記 他
16. フィールドノート
17. フィールドノート
18. Miyako Kazumata
19. 瀬長島神事記録
20. フィールドノート
21. [入墨ノ研究] [久米島研究資料]
22. [表題なし]
23. [表題なし]
24. [表題なし]
25. [表題なし]
26. [表題なし]
27. [雑ノート]
28. [雑ノート]
29. 書籍目録 [尚家蔵]
30. No. 1 琉球国由来記年中祭祀 全
31. No. 2 琉球国由来記年中祭祀 全
32. 琉球国由来記
- 33A. No. 4 琉球国由来記年中祭祀 全
- 33B. 伊平屋島旧記 (雍正四年丙午四月)

34. 琉球国由来記
- 35A. No. 3 琉球国由来記年中祭祀 全
- 35B. 稲之二御祭公事 勢頭方 (尚侯爵家所蔵本)
- 35C. 御願御双紙 勢頭方 (尚侯爵家所蔵本)
36. 琉球国由来記社寺乾 (禪) 禪門諸寺旧記 (尚侯爵家所蔵本)
37. 古事集 評定所 丑日 (尚侯爵家所蔵本)
38. 古事集
39. [古事集]
40. 古事集
41. 古事集
42. 古事集
43. 琉球国中山世鑑 序共 原六本完
44. (承前) 江戸立之時仰渡并応答之条々之写
45. 中山世譜 附卷 (尚侯爵家所蔵本)
46. 琉球国旧記 他
47. 球陽 外卷二、三 他
48. 球陽 附卷一、二、三 他
49. 碑文記 全 (尚侯爵家所蔵本)
50. 「碑文集」改め碑文記 (承前)
51. 御財制 (沖縄県立図書館所蔵本ニ拠ル)
52. 琉球国中山王府官制 全
53. 琉球歴代国王世統事功
54. 琉球冊封使一件 完
55. 同治五年 勅使以下唐人より国王并嫡子且王子以下役々江進物帳
56. 紋様A
57. 紋様B (紋様Aヨリ続ク)
58. 紋様C (紋様Bヨリ続ク)
59. 王子衆以下娘婚礼之時衣類并諸道具定 評定所
60. 琉球国中山世鑑 序共原六本 完
61. 各間切のろくもいのおもり (全)

62. 紋様
63. 宮古島旧記（「仲宗根本ニテ校正」とある）
64. 宮古、八重山、大島研究録Ⅰ
65. 宮古、八重山、大島研究録Ⅱ
66. 宮古、八重山、大島研究録Ⅲ
67. 宮古、八重山、大島研究録Ⅳ
68. 奄美大島
69. 至聖先師天上聖母 由来記 鄭天錫
70. 王代記 全
71. [家譜拔萃]
72. [八重山資料]
73. [家譜集]（抜萃）
74. [諸史資料抜萃]
75. [諸史資料抜萃 他]《紬関係資料》
76. 奄美史談 全 都成植義著
77. [奄美関係諸書抜萃]
78. [琉球国の記事集成]（記事抜萃）
79. [琉球国の記事集成]（記事抜萃）
80. 文様資料文身考
81. 周煌 琉球国志略

なお、『鎌倉芳太郎資料集』の分類については①1. 鎌倉芳太郎ノート、2. 『歴代宝案』、3. 原稿、4. 古文書・毛筆写本、5. 古文書等の筆写原稿、6. 絵図、7. 地図・地籍図・その他図面、8. その他資料、9. 写真資料というように、資料成立の要素という観点で分類した例があった⁹。しかし本稿では、同じ資料成立の要素ではあるが、原田あゆみの分類に従い次のように区分する¹⁰。

I 文献関係資料

鎌倉芳太郎ノート、『歴代宝案』、原稿、古文書・毛筆写本、筆写原稿（古文書ほか）、絵図・地図・図面等、その他の資料

II 紅型型紙資料

紅型紙ほか

Ⅲ 写真資料

写真資料ほか

Iに含まれる鎌倉ノートは全81冊、故鎌倉芳太郎氏のコレクションした多数の写真や実物資料・聞き調査に関する記録ノートであり、抄写した資料を収めたノートである。これらを、「はじめに」で触れたとおり各期に沿い、各ノートに記載された日付を取り出し、時系列的整理を行った資料を作成した。各期に集積したものをそれぞれ【表A】(第1期)、【表B】(第2期)、【表C】(第3期)として作成した。但し、凡例でも述べたように、本稿では資料【表A】の範囲のみ取り扱い、その他は別稿で検討する。

I-3. データ作成の結果より

既述の過程を経た結果、幾つの特徴が判明したが、最も特徴的な事柄は次の①～④に要約して示す。

- ① ノートの連番と第1期～第3期の時期的区分は必ずしも一致しない。
 - ② 同時期に複数のノートが作成された可能性がある。
 - ③ ノートの形態は、a. 現地調査、b. 現地調査+現地資料の書写を収録したもの、c. 他資料の書写のみのものがある。
 - ④ 各ノートには、鎌倉から資料を譲られた際にコピー番号(頁番号ではない)を付してあるが、稀にノートをめくるにつれ番号が小さくなるものがある。
- ①～③について、具体例(時系列順)を挙げることにする。
- ①の場合、鎌倉が来沖した第1期に相当するノートは【表B】より [26] [25] [23] となる。

②の例については、【表B】の65-68が [23] [36] [23] の並びで順不同となっているなどが指摘される。また、[36] は絵師研究録・『女官御双紙』・結繩に関する記録(イラスト)・オモロ抄写・その他、脈絡のない項目を紙面にびっしりと書き込んである。[36] も第1期に備忘録として作成されたのではないかと考える。また、同一紙面に時間を経過して記録された記事が存在する。例えば [25] は大正12(1923)年8月9日と9月1日の記録が同一頁で確認できる。これなども②の特徴を示し、また①例を裏付ける根拠となった。

③は、現地調査のみの例でいえば [16] [17] [18] [19] など、現地調査で描いたスケッチがほとんどである。現地調査の例としては [9] [10] の「久米島研究録」にみられる。また、[70] 以上はほとんどが他資料の書写のみになっている。

④は、鎌倉よりノート資料を譲り受け、資料整理を行う際に起こった単純なコピー番号の書き違いの可能性がある。一例を挙げると、[26] の大正10 (1921) 年9月9日の記事のコピー番号が406、9月27日が405となっている。

以上がデータ作成の方法とデータによって得られた第1期～第3期におけるノート区分の概要である。ノートの作成時期が時系列に沿っていないのはなぜか、という理由については、②・③の特徴から、鎌倉は複数のノートを携帯し、それぞれのテーマに沿って蒐集した資料を各ノートに筆記していたからと考える。①より、各ノート表題に付された連番、例えば前掲一覧の「1. 美術 彫刻」の「1」というノート自体に付された番号は、後年付された可能性があり、特に大正14 (1925) 年、昭和3 (1928) 年に開かれた啓明会主催の『琉球芸術展覧会・講演会』という鎌倉自身の研究の節目においてナンバリングを行った可能性はないか、ということも視野にいれて考える必要がある。

以上が作成したデータの分析結果より得たノート資料の特徴である。ノートの特徴に配慮しつつⅡ～Ⅳ章において「琉球芸術調査」の特徴を概観し、考察する。

Ⅱ. 第1期－「琉球芸術調査」初期

第1期の「琉球芸術調査」初期は、のちの琉球芸術への強い関心を形成した重要な時期である。琉球芸術への関心は、鎌倉自身が「色彩論」(『古琉球紅型 第一期上』: 1967)、「技法論」(『古琉球紅型 第二期上』: 1969) で詳述している。2つの論文をまとめると、凡そ次の通り。

鎌倉は幼少期から日本画の技法に慣れ親しみ、長じて東京美術学校時代に交流が始まった画家の水上素生より、琉球で図画教師を勤めることを勧められ、琉球での図画教師の道を選択する。また、美校の教官である平田松堂から琉球へわたる前に奈良見学をするよう勧められ、奈良に滞在、唐招提寺で鑑真和上が漂着した先が沖縄と知る(「技法論」PP2-3・PP4-5)。その後勤務地の琉球で

は、「南島特有の神秘的な色彩現象に心引かれ、これを色々な角度で観察し解明したいという念願」をもつ（「技法論」P1）。幼少時代からの日本画技法に対する関心、出会った人々、奈良での見聞が、鎌倉自身の資質や原体験としてあり、教師時代に自ら求めて研究者と交流し、様々な刺激を受けたことが研究者として飛躍する契機となるのである。

Ⅱ章では、鎌倉の「琉球芸術調査」が本格化する以前の時期について、各項で整理し、分析を加える。

Ⅱ-1. 来沖まで

第1期「琉球芸術調査」前期が重要な時期であることは少し触れたが、鎌倉の幼少期における日本画体験について『古琉球紅型 第二期上』ほかより引用、付加する。

鎌倉の技法への関心、美校へ進学後の行動については、11歳頃から郷里の香川で東京美術学校卒業の図画担当教諭、江村清三郎の画業の手伝いをしたことに遡る（鎌倉 1969：P1）。江村のもとで膠の煮方・胡粉のとき方・絵具の練り方・岩絵具や胡粉へ水絵具や植物染料、顔料（鉱物）等の混色法を学んだと述べている。理数系の科目が得意な鎌倉らしく、顔料に様々な素材を混ぜて色を発色させる方法（化学的变化）に特に興味を示し、香川県師範学校本科第一部を卒業後、東京美術学校図画師範科へ入学した（久貝 2003；PP20-21）。

大正10（1921）年3月、美校図画師範科を卒業した鎌倉は来沖し、女子師範学校・第一高等女学校に赴任。教諭赴任中の期間が第1期に相当する。

鎌倉が琉球の文化・歴史・芸術に視線を向けた契機については、既述したとおり幾つかの影響がある。一つは大正3（1914）年琉球へ出かけ、第8回文展出品の「琉球の花」で入選した水上泰生の存在である。

大正時代、沖縄には画家が数多来沖、各々の沖縄へ抱く憧憬をキャンバスに託した。国内では、日露戦争勝利後、大正デモクラシーの自由な風潮がおこるとともに、白樺派によって後期印象派が紹介される¹¹。国内的には、戦勝気分¹¹で植民地主義的に満州・韓国・南方への視線を拡大した時代である。近代において正式に日本の版図となった沖縄県であったが、来沖した画家は画材に「異国」「南国」のエキゾチックなイメージを求めた¹²。水上もその時期に来沖を果たした。

そういう水上の行動を見聞し、鎌倉も憧憬を募らせた部分があったと推察する。水上泰生より沖縄の図画教師の職を勧められた鎌倉は、恩師の平田松堂より、沖縄へ行く前に奈良の古美術見学をするよう指導をうける。研究費100円の支給及び奈良県知事への紹介など、存外の好条件で卒業旅行へと旅立つのである。¹³

行先の奈良では1カ月余も滞在。唐招提寺で鑑真和上が阿兒奈波（沖縄）島へ漂着したという記録を読み、これから行く沖縄に唐代の建築や美術が伝わっているかもしれないという期待をもって来沖する。¹⁴水上との交流から得た知識、唐招提寺での見聞という体験などから、鎌倉自身、中国文化の影響を受け南国特有のエキゾチシズムに満ちた琉球というイメージを描いて来沖した可能性がある。

II - 2. 「琉球芸術調査」初期

鎌倉は赴任後1～2か月して元首里士族の座間味家へ下宿する。¹⁵そして「…学校勤務の余暇、首里を中心にして島内各地の旧王国時代の遺跡を見て廻った」（鎌倉 1982:P167）。この時期に[26][25][23]のノートが作成される（【表A】参照）。これらノートを見る限り、余技の範囲を超え、後の「琉球芸術調査事業」への展開が十分予測できる。それほど、ノートでは琉球や沖縄研究への傾倒が明確に読みとれる。¹⁶

鎌倉は雑誌『白樺』を愛読する文学青年でもあった。¹⁷

[26]の冒頭は、次の詩から始まる。

汝等/若き輝ける子よ/新しく生きよ/現実の幸いに/赤く白く/人生の音楽は/汝の血管と肉とに鳴りひゞけ/喜び叫べ/初夏の緑と/薔薇畑の中に…（以下略）

「汝等」¹⁸に向け、生きる理想や喜びをうたった若々しい一編に、白樺派の「個人主義」「理想主義」の影響が窺える。美術教師として、また琉球芸術の研究者として燃える思いを託した詩であるともいえる。

文学好きであった鎌倉は、後年『万葉集』を好んだ。初期の琉球方言・オモロ研究に寄せた関心と通底するものが読み取れる鎌倉の志向である。[26]はそのあとに『おもろさうし』・『球陽』・『碑文記』・『女官御双紙』・『混効験集』

の書写・「阿麻和利」に関する考察・琉歌の書写その他、宗教・哲学の視点から琉球の歴史や文化の考察、という内容が続いている。

鑑真和上の琉球漂着

[25] はいわゆる野帳（フィールドノート）であり、日付は比較的詳細に記入されている。聞き書きや出先で蒐集した資料の記録の余白にその日の出来事などのメモも確認できる（【表A】¹⁹10）。初めの部分に「浮繩嶽なる名称」というメモがあり、浮繩と「沖繩」の名称の関連、「崇元寺」「安里川」を利用した支那（中国）との交易について記してある。続いて鑑真和上に関する記事・『群書類従』からの抄写が続く。鑑真和上関係の資料は、第1期調査の契機となる重要事項であり、来沖当初の鎌倉の最大関心事であった。

ところで、鎌倉の『沖繩文化の遺宝』（1982）は、第一部は「第一章 自然の条件」から始まり、「一 領域」「二 海流」「三 季節風」という、鎌倉独自の視点で立項されている。「領域」については琉球列島の地理的位置についての概要、「海流」で日本を囲む海流と、海流によって形成された航路、沖繩と熊野、福州を結ぶ黒潮について述べている。「季節風」では、福州との交易は、冬至と夏至の前後の最適の日を、「御日^{うていどうが}拝み」の儀式の際に「時取り」が選択し（太陽信仰）、黒潮にのって船出した…かくして中国から、日本から、琉球へ文物がもたらされ、琉球の文化や宗教観の形成に、これらの自然条件が強く影響していると鎌倉は考察する。そして、鑑真和上も北流暖流圏（黒潮）にのり、「阿兒奈波」へ漂到した。それが前述した浮繩嶽^{ウチナーヌウタキ}であると推定し、琉球研究の端緒は鑑真和上研究から始まったと述べている（鎌倉：1982）。鎌倉の独特な研究の視点についてはあとの章でも取り上げるが、本項では鎌倉が琉球研究へ関心を寄せた要因の一つとして、鑑真和上への関心がまず先にあったという点を強調したい。つまり、「自然の条件」「領域」「海流」「季節風」という論考の項建てに、琉球文化の源流を探求したいと欲する比較文化研究的視点が確認できるのである。そして、これら文化の源流を探る視点は、柳田国男の『海上の道』が示した日本人の源流を探る視線と共通する志向性が見出せる。

もう一つ、奈良での古美術研究が、鎌倉の美の判断基準をより高め、桃林寺研究や首里城研究、絵師研究ほかに大いに反映されていることも指摘しておきたい。勿論、末吉安恭という優れた先覚や、末吉を介して交流を深めた伊波を

始めとする知識人から多くの教示を受けたということもあった。しかし、首里城建築の美も桃林寺壁画の美も等価であり、一瞥して研究対象と成り得るかどうかを判断する価値基準は、古美術の技法や様式に関する知識を深く学習しなければ体得できない。その美的基準の確かさを、八重山桃林寺の金堂・仁王像・壁画研究をまとめることで示したといえる。

沖縄研究者の影響

『おもしろさうし』関連の資料蒐集に着手した理由については、伊波普猷、末吉安恭、眞境名安興ほか、琉球・沖縄研究の第一人者との交流が指摘される。

【表A】7で示したが、鎌倉は、来沖早々兵役で6週間ほど教鞭を執っていない。末吉安恭とは、大正11(1922)年『沖縄タイムス』で連載されていた「琉球画人伝」²¹を読んだ鎌倉が、その後自ら末吉のもとを訪ねたことから交流が始まる。末吉は、伊波普猷をして「麦門冬(安恭の雅号)は、沖縄史鑑賞家としては沖縄随一」(新城 1982:P41)と言わしめ、また伊波普猷・眞境名安興とともに「現地に於ける琉球学者の三羽鳥」(鎌倉 1982:P167)と称されるほどの人物であった。人脈も幅広く、末吉との交流によって鎌倉の人脈も飛躍的に広がる。比嘉朝健や小橋川朝重(アマチュアカメラマン)²²、長嶺宗恭(華国)らと知り合うのはこの時期である。

また、沖縄県立図書館に足しげく通い、伊波普猷、眞境名安興とも面識を得ている。

長嶺宗恭は「琉球画人伝」に関して一次資料をまとめた人物である。鎌倉は大正11(1922)年8月22日に長嶺宅を訪問(鎌倉 1982:P167)、末吉は、前掲記事を長嶺の原案によって執筆したが、琉球芸術に興味をもった鎌倉に長嶺を快く引き合わせた。

鎌倉は、啓明会主催の講演会で2度「琉球芸術調査」事業の報告を行い、『遺宝』では「琉球絵画の系譜」として琉球絵画論・画人伝をまとめたが、それらは長嶺宗恭―末吉安恭の手法や論考を鎌倉が改訂したものである。

鎌倉の琉球芸術研究は、長嶺・末吉との交流を契機に飛躍的深化をみせ、八重山芸術研究へと進む。八重山芸術研究とは、後の伊東忠太との共同名義の「琉球芸術調査」事業の先鞭となる「先嶋芸術と桃林寺の印象」(『沖縄タイムス』)

で展開された芸術論のことである。鎌倉は八重山調査から那覇へ戻ると直に小橋川朝重の元を訪ね、小橋川から以下の言葉をかけられている。

末吉君と眞境名君とがもうたいへん待っているよ、このお土産をみたらどんなに飲ばれるかもしれない（鎌倉1974：P6）。

鎌倉にとり末吉の存在はそれほど大きく、「若しも末吉と相会わなかったならば、私がおの後の調査研究へ進み得たかどうか」（鎌倉 1982：P167）と述べるほど、琉球芸術研究と鎌倉を繋ぐ鍵となる重要人物だった。

鎌倉の最初のノート [26] は『おもしろさうし』関係資料である。[26] では、沖縄で生活するための語学習得というより、もはや研究の対象として琉球方言を扱う様相を呈している。鎌倉の琉球方言研究への傾倒は、末吉安恭の活動や、伊波普猷の『おもしろさうし』校訂執筆の情報などを見聞していたことが大きく影響していたといえる。

鎌倉の方言習得・方言研究に影響を与えた伊波普猷は、大正10（1921）年当時、沖縄県立図書館の嘱託館長を明治42（1909）年より12年間続けており、言語学者というよりは啓蒙思想家としての活動に比重をおいていた。しかし、同年1月に沖縄を訪ねた柳田国男と対面の際に『おもしろさうし』をまとめ、出版することを強く勧められ、また、7－8月には折口信夫と会うなど、「啓蒙運動家から一学究に立ち返ることを翻然として決断」（比屋根1921：P267）し、『おもしろさうし』研究を再開する²³。伊波の鎌倉への影響については後述するが、鎌倉と面識を得た頃、伊波にとっても学者、或いはとして重大な選択をしなければならぬ時期にいたといえる。

II-3. 第1期宮古・八重山研究—八重山芸術研究へ

宮古・八重山研究については、鎌倉は女子師範学校の入学試験官として1923（T12）年2月10日－2月17日まで宮古、2月18日－3月5日まで八重山へ滞在している（【表A】11-33）²³。

宮古での記録は、現地に到着して、まず宮古方言の聞き書きから始まっている。2月13-15日までは「宮古郡の中等学校入学試験のために忙殺」されつつ久松小学校の新築落成式へ参加するなど、宮古島の舞踊や音楽を楽しんだ様子が記録されている²⁴。[26] の前半は、方言に関する記録が殆どである。表記的特

徴としては「^{ビヤルミツ}漲水神社」「^{フサ}草」「^{ウブニ}大根」「^{ガヅマル}榕樹」のように、単語の漢字表記に会話で用いる仮名のよみをふる（方音表記）が、途中からローマ字に仮名をあてて表記している。また、所々に「形容詞ハいつも二重ニナル」「宮古発音/エ列ハナクテイ列ニ変ズ」（P288）等の書き込みがあり、宮古方言の言語学的説明や口蓋化が起こる例を説明している。また、芸能や音楽にも関心が強く、「トウガニー」「Nimanushu—宮古の献上歌²⁵」等の古歌謡の歌詞を採譜・記録している。この点については、伊波の研究以外にも、民俗学や文学の分野からの強い影響が認められる。歌詞の採譜に関して付加すると、採譜は〔25〕以外のノートにも、聞き取った時点で記載をつとめている。

八重山へ向かった鎌倉は、そこでも方言や古歌謡の聞き書きを行っているが、特筆すべきは地元の教育者や知識人の助けを借りて蔵元絵師研究を行ったことである。18日、八重山へ到着後、鎌倉自身が「この日から狂気のやうに毎日研究に没頭²⁶」したと語っているように、凄まじい集中力で八重山芸術研究を行っている。

鎌倉の八重山芸術研究は凡そ以下の通りで行われた。まず、現地での聞き取りによって蔵元絵師の存在を特定した。次に協力を要請して家譜資料等を書写させてもらい、必要に応じスケッチをさせてもらう等。

鎌倉の調査の結果、近世の八重山蔵元絵師の仕事には、地図を描く・外国船漂着の際の記録画を作成する・諸儀式の風俗を描写し、上流士族への献上物とするなど、日本画の絵師とは違う独特の絵師の勤めがあることが顕かになっている。琉球の絵師の生業は、ひとえに八重山のみならず王府中が同様な仕組みであった²⁷。蔵元最後の画家、宮良安宣²⁸や彫刻家の喜舎場用安へインタビューを行い、長興氏の花城善定・大浜善巧・大浜善繁、また喜友名安信など²⁹、八重山の近世末～近代の絵画や彫刻・旗頭の基礎的研究を行っている。八重山の蔵元絵師の研究は、後に「先嶋芸術と桃林寺の印象」として末吉安恭が主筆をした『沖縄タイムス』に連載された。

八重山芸術研究で鎌倉が直観した点で重要な点について概観する。まず①桃林寺の権現堂・仁王像・壁画研究と首里の円覚寺金堂壁画との連関を美術史的に論じる筋道をたてたこと、次に②日本美術史における鎌倉時代～それ以前の時代の大和絵や彫刻との関連性について考察したこと、つまり、八重山を含む

琉球の美術史を体系的に組み立てようと試みた点が注目に値する。

①②については、Ⅱ－4で述べた奈良での古美術調査が深く関わっている。多くの仏像彫刻や仏画などを直に鑑賞し、僧鑑真漂到の話を知った鎌倉は、王府時代（又はそれ以前）の琉球の芸術が、宗教の伝播と密接につながっていることを理解し、日本美術史に通底する芸術観を理解していた。家譜資料を重視し（歴史的検証）、写真記録に興味をよせるなど、鎌倉の「琉球芸術調査」の特色は、既に八重山芸術研究において示されている。その後の研究の展開をたどる上で、八重山芸術研究は、重要なポイントである。桃林寺の権現堂・仁王像・壁画研究は、個人的な琉球芸術研究から「琉球芸術調査」事業へ拡大するための画期的研究であったと位置付ける。

3月8日頃、鎌倉は八重山から那覇へ戻り、精神的に調査を行い、4月18日に離沖する。【表A】35以降では3月17日からの記録しかないが、[25]では17日以前の八重山芸術に関する書き込みと思われる記録があり、同表48まで、ほぼ連日野外調査を行った形跡がある。首里では尚家所蔵の絵画のスケッチ、写真撮影を行っている。

（続く）

注

1. 同事業は、首里城跡に建っていた琉球大学移転事業（1977-1984）後、沖縄の本土復帰記念事業として1986年の閣議決定を受けて本格的に開始される。1989年、首里城正殿・南殿・番所・北殿・奉神門の復元工事が次々と着手され、1992年には首里城公園として一部オープンした。
2. 『歴代宝案』はもと2部あり、首里城と久米村（クニンダ）の天妃宮でそれぞれ保管されていた。首里城本は、琉球処分後内務省へ移管されたが関東大震災で消失。久米本は鎌倉芳太郎が昭和8（1933）年影印本作成、ほか東恩納寛惇も影印本を作成した。また、同資料は小葉田淳ほか（現国立台湾大学所蔵）・東京帝国大学史料編纂所（現東京大学）による写本が作成された。同資料の復元事業は、現存する鎌倉本・東恩納本・国立台湾大学図書館所蔵本・東大史料編纂所本・那覇市歴史博物館所蔵本を校合して行われた。
3. 形付屋の旧家である沢岷家に伝わっていた同家独自の技法。鎌倉によると起源は15世紀以前、中国から伝わった摺込手法の印金型系統の型染めという（鎌倉 1982：P243）。蒟蒻糊を使用し、神衣裳に用いられた技法であるが、明治12年以降廃れる。現在では「古琉球紅型浦添型（蒟蒻型）研究所」（伊佐川洋子代表）が同型の復元にかかわっている。
4. 「あとがき」『沖縄文化の遺宝』P280（岩波書店：1982）。
5. 注4

6. 「鎌倉芳太郎先生の遺志」『沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館所蔵 鎌倉芳太郎資料目録』序文（沖縄県立芸術大学附属研究所：1998）
7. 注6参照。鎌倉芳太郎が資料寄贈を快諾した背景として、沖縄に初めて芸術大学ができるであろうことへの祝福と、首里城復元への願望があった。それを理解した外間守善は、鎌倉の志に沿うよう、当時の県知事である西銘順治と交渉し、西銘も尽力したという。
8. 注1参照。
9. 『沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館所蔵 鎌倉芳太郎資料目録』P 1（沖縄県立芸術大学附属研究書：1998）による。
10. 原田あゆみ「鎌倉芳太郎の前期琉球芸術調査と美術観の変遷」『沖縄県立芸術大学附属研究所紀要 沖縄芸術の科学』第11号P27-図1（沖縄県立芸術大学：1999）参照。
11. 同派は、学習院出身の武者小路実篤・志賀直哉・里見淳・柳宗悦・有島武郎ほかのメンバーによって明治43（1910）年に結成され、同人の編集発行した雑誌『白樺』は一世を風靡した。白樺派による後期印象派の紹介については、酒井哲郎の次の説明を根拠とする。「白樺同人たちは…国家主義の風潮に批判的で、学習院というエリート集団のなかの異端児であった。彼らは個の確立とコスモポリタニズム、人道主義を主張して、西洋の文学や芸術の新思潮を紹介した」『美術の分野では、ロダンや後期印象派の紹介などの功績がよく知られている』（酒井 1997：PP4-5）。『白樺』の活動は「日本のモダニズムの前衛的役割を果たした」（酒井 1997：P12）。『白樺』の編集は主に柳宗悦が行い、後期印象派を紹介したのも柳であった。鎌倉も『白樺』に影響を受けた（鎌倉 1982:P61）が、それについては以前触れたことがある（久貝 2003：PP21-24）。なお、『白樺』は大正12（1923）年8月第160号をもって終刊する。
12. 翁長直樹「琉球イメージを求めて」『美術館開館記念展 沖縄文化の軌跡 1872-2007』PP54-55・PP68-93）
13. 原田あゆみ（注10）によると、滞在中の鎌倉は「県知事からも各寺院への招待状をもらい」「大和の古寺をゆっくり散策し、法隆寺では須弥壇に上がることや、今は無き金堂の壁画をも三脚梯子に上ってみることを許され」「法隆寺では壁画を毎日のように見学し、10日もの間逗留」する厚遇を受けている。
14. 久貝典子「鎌倉芳太郎の琉球芸術調査（上）」『沖縄文化』96号P25（『沖縄文化』編集所：2003）。
15. 与那原恵『首里城への坂道 鎌倉芳太郎と近代沖縄の群像』PP33-42（筑摩書房：2013）
16. 事実、教職の任期を満了後、東京で伊東忠太にノートを示すと、伊東は「君に就て琉球芸術の説明を聞き、多大の感興を覚へたので、終に君と共にその研究に従事することになり、その資金を得べく財団法人啓明会に諮つて見た」（『琉球紀行』『木片集』P439）。すなわち、既に日本建築史の大家となっていた伊東忠太に共同名義で琉球芸術研究を行う気にさせるほど、広汎で綿密な琉球芸術調査ノートとなっていたのである。
17. 注14P21
18. この場合は教え子たちのことである。
19. 表の「内容」欄に示されている通り、ノートには研究者としてのみならず一人の青年として率直な心情を吐露した書き込みもあり、人となりを知る上でも貴重な記録である。
20. 崇元寺の印象については、次の資料参照。「色彩論」『鎌倉芳太郎型絵染作品集』P180（講

談社:1976)。

21. 明治19 (1886) 年生一大正13 (1924) 年没。俳人・ジャーナリスト。雅号麦門冬。幼少より元首里士族であり漢詩・歴史・絵画・芸能その他に造詣が深かった父安由の影響を受ける。日本中学通学のため上京、しかし卒業は果たせず帰省。その後結婚・上京を経、帰郷後は『沖繩毎日新聞』『琉球新報』『沖繩朝日新聞』『沖繩時事新報』『沖繩タイムス』など各紙を転々としながら俳壇・琉歌・絵画・芸能その他の記事を担当、小説・同人誌発行なども行った。大正7 (1918) 年、博物学の巨人といわれた南方熊楠へ『球陽』25巻の写本を送り、交流があるも事故により水死する。
22. 生没年不詳。1922年9月15日『沖繩タイムス』に名前が見える。那覇市山下町在住だった可能性がある。
23. 比屋根照夫「四 啓蒙者伊波普猷の肖像一大正末期の思想の転換」『近代日本と伊波普猷』P137 (三一書房:1981)。伊波普猷は大正2年に病を得、研究に対する興味を失おうとしていたところ、柳田國男と対面し『おもろさうし』校訂を懇望された。その時の心境を「私の一生に取つて忘れることの出来ない大事件」であり「この刺激によつて私はもとの学究に立帰る決心をしました」と述べている。
24. 『遺宝』P211によると、次の日程で両島へ滞在している。「…2月10日甲南丸で那覇港発、翌日宮古島平良港着、同月17日八重山丸で平良港発、翌日石垣島石垣港着、3月5日宮古丸で石垣港発、同7日那覇港着」
25. 曲名「ニーマヌシュー (根間の主)」と記されている。
26. 鎌倉芳太郎「先嶋藝術と桃林寺の印象」『八重山文化 第2号』P5 (東京・八重山文化研究会:1974)。
27. 尚寧王代の万暦40 (1612) 年頃の貝摺奉行の様子は次の通りである。職人は、兼業の貝摺師 (主取2員)、絵師 (主取1員・属官6員)、檜物師 (主取1員)、磨物師 (主取1員)、木地引勢頭 (1員)、御櫛作 (主取1員)、三線打 (主取1員)、矢矯 (主取1員)。また、家譜資料では、絵師石嶺伝莫は、康熙17 (1678) 年3月に絵師となり、康熙28 (1689) 年12月国場翁主の婚礼のため衣裳の下絵を描いたので米1石・塩2俵・炭1俵を拝領したとある (「新参瓊姓家譜正統」)。つまり、絵師には衣裳の下絵を描く勤めもあったのである。このように、琉球の職人は、複数の技術を習得する者が重用された (『貝摺奉行』『琉球国由来記』巻2)。
28. 宮良家には、蔵元絵師の風俗画稿が114枚 (『八重山蔵元絵師画稿集』1993) 残っており、鎌倉はこれを譲り受けたが、昭和50 (1975) 年、「蔵元絵師が描いた八重山風俗展」が八重山博物館で開催されると画稿全てを寄贈した。石垣市は鎌倉の功績を称え、昭和52 (1977) 年10月、石垣市名誉市民として顕彰されている (久貝典子「紅型を通してみた鎌倉芳太郎の琉球工芸観」『民族藝術』P60表1 (民族藝術学会:2007))。
29. 鎌倉が八重山蔵元絵師として挙げた人々については以下の通り。花城善栄 (1740-1826) は針図 (測量図) の稽古のあと、「杣山開墾地図」や「島長横愼廻 (全島) 地図」・「御召料 (王家御用衣料)」・「御内原御用布 (王家奥御用布)」御用を仰せつけられた人物。絵師の記録として最も古い。大浜善巧 (1768-1835) は花城善定の長男。彫刻家。桃林寺山門の仁王像 (作者は文明氏久手賢仁屋呂忠、加勢が上官氏川平仁屋正肖、松茂氏小浜仁屋当明) が明和の天津波で被害にあい、破損していたものを修復した。グダウシユウマイ (風

変りの御主前)とよばれた。大浜善繁(1761-1814)は花城家とは親戚の間柄で、近親の善定から画業を学んだとされ『旗頭紀』(旗頭図案集)を作成した。後年は、西表首里大屋子となったので、スサイシノバグ(白髪的首里大屋子)とよばれた。喜友名安信(1831-1892)は桃林寺権現堂社殿の壁画、「鷹図杉板絵」を描いた画家。

引用・参考論文及び文献

- 朝比奈勝編1975『季刊 染織と生活 第九号 夏』染織と生活社
- 石垣市立八重山博物館「八重山蔵元絵師画稿集」2002 石垣市立八重山博物館
- 伊東忠太1928『木片集』萬里閣書房
- 伊波普猷1974『伊波普猷全集 第1巻』平凡社
- A. P. ジェンキンス「復興後の沖縄美術市場—公文書に見る米軍の管理・統制 1947～1948」『名渡山愛順が愛した沖縄 名渡山愛順展』2009 沖縄県立博物館・美術館
- 大城精徳編1972『琉球の文化』第2号 琉球文化社
- 岡本恵徳1977「柳田国男と沖縄」『新沖縄文学 特集・沖縄研究の先人たち』沖縄タイムス社
- 株式会社沖縄文化の杜編 2008『沖展 60年記念 会員作品集 2008年』株式会社沖縄タイムス社
- 沖縄県立芸術大学附属研究所編 2008『沖縄芸術の科学』第20号 沖縄県立芸術大学附属研究所
- 沖縄県立芸術大学附属研究所編1998『沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館蔵 鎌倉芳太郎資料目録』沖縄県立芸術大学附属研究所
- 沖縄県立芸術大学附属研究所 芸術・文化部門 波照間永吉編2004『鎌倉芳太郎資料集(ノート篇Ⅰ) 美術・工芸』沖縄県立芸術大学附属研究所
- 沖縄県立芸術大学附属研究所 芸術・文化部門 波照間永吉編2006『鎌倉芳太郎資料集(ノート篇Ⅱ) 民俗・宗教』沖縄県立芸術大学附属研究所
- 沖縄県立芸術大学附属研究所 担当:波照間永吉・柳悦州 2014『沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館蔵 鎌倉芳太郎資料「文献資料」目録』沖縄県立芸術大学附属研究所
- 沖縄県立博物館・美術館2014『沖縄県立博物館・美術館企画展 麗しき琉球の

- 記憶 鎌倉芳太郎が発見した美』(株)文化の杜
- 翁長直樹2007「自己表現を求めて 作られた主体からの脱却」『美術館開館記念 沖縄文化の軌跡 1872-2007』沖縄県立博物館・美術館
- 鎌倉芳太郎1964「久米島紬についての考察 —琉球「かすり」の発祥を論ず」『季刊 南と北』第31号 南方同胞援護会
- 笠森伝繁編1925『財団法人 啓明会第十五回講演集』財団法人啓明会事務所
- 笠森伝繁編1928『財団法人 啓明会第二十八回講演集』財団法人啓明会事務所
- 鎌倉芳太郎1968『古琉球紅型 第一期 上』京都書院
- 鎌倉芳太郎1969『古琉球紅型 第二期 上』京都書院
- 鎌倉芳太郎1973「琉球紅型攷 —まぼろしの醜型—」『〈季刊〉古美術』41 三彩社
- 鎌倉芳太郎1974「先嶋芸術と桃林寺の印象」『八重山文化』第2号 東京・八重山文化協会
- 鎌倉芳太郎1976『鎌倉芳太郎型絵染作品集』講談社
- 鎌倉芳太郎1976『セレベス沖縄 発掘南海古陶瓷』国書刊行会
- 鎌倉芳太郎1982『沖縄文化の遺宝』岩波書店
- 神坂次郎2002「俺は夏草 麦門冬—末吉安恭の人生」『歴史街道』3—5月号 PHP研究所
- 球陽研究会編1974『球陽 原文編』角川書店
- 球陽研究会編1974『球陽 読み下し編』角川書店
- 久貝典子2012「「沖展」工芸部備忘録」『琉球孤の自立・独立論争誌 うるまネシア 第14号』21世紀同人会事務局
- 久貝典子2003「鎌倉芳太郎の琉球芸術調査(上)」『沖縄文化』96号 沖縄文化協会
- 久貝典子2004「鎌倉芳太郎の琉球芸術調査(下)」『沖縄文化』97号 沖縄文化協会
- 久貝典子2006「紅型という名前」『沖縄学』第9号 沖縄学研究所
- 久貝典子2007「紅型を通してみた鎌倉芳太郎の琉球工芸観」『民族藝術』VOL.23 民族藝術学会
- 久貝典子2012「柳宗悦の「琉球行」をめぐる—鎌倉芳太郎の「琉球芸術調査」

との比較を前提にして一』『沖縄芸術の科学』第24号 沖縄県立芸術大学附属研究所

芸術研究振興財団・東京芸術大学百年史刊行委員会共編1992『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第2巻』(株)ぎょうせい

国立国語編集所編2001『沖縄語辞典』財務省印刷局

兒玉絵里子2012『琉球紅型』株式会社ADP

後藤総一郎1984「略年譜」『新潮日本文学アルバム 柳田国男』新潮社

下中弥三郎編1929『世界美術全集』平凡社

首里城公園友の会編『首里城の復元～正殿復元の考え方・根拠を中心に～』2003 (財)海洋博覧会記念公園管理財団

新城栄徳1999「沖縄近代文化年表」『琉文手帖4号』琉文菴

鈴木博之2003『伊東忠太を知っていますか』王国社

東京芸術大学岡倉天心展実行委員会2007『岡倉天心—芸術教育の歩み—』東京芸術大学岡倉天心展実行委員会

原田あゆみ1999「鎌倉芳太郎の前期琉球芸術調査と美術観の変遷」『沖縄芸術の科学 第11号』沖縄県立芸術大学附属研究所

比屋根照夫1981『近代日本と伊波普猷』三一書房

資料 ノートにみる鎌倉芳太郎の足跡 【表A】（第1期）

		期間	調査の分類(目的)	西暦(年)	日付	ノートNo.	内容	頁No.	備考1	備考2	履歴との照合
1	1期	1921年4月-1923年4月	沖縄の芸術・歴史・言語・風俗への関心	1921	9月5日	26	雨日和なり 屋慶名親雲上呉著温の系図を研究に坪川に行く 系図不明なり/泉崎の仲地家を訪れ主人不在なり/毛長禰佐渡山安健の研究に行く 首里山町佐渡山御殿には分家してなしと 直ちに那覇若狭町佐渡山安貞氏方を訪ねる又不在なり	490		那覇	
2					9月6日	26	…偉大なるものは晩成なるを 汝を知るは汝自らなり/運命は神様の摂理なり…(No.26冒頭の詩より)	406		首里	
3					9月9日	26	…内なる霊は闇にあへげざるよ/あゝ 死なる時は来るべし永遠に来るべし	406		首里	
4					9月27日	26	秋のひがんのお祭りあり なつかしく不思議なる儀式よ/この日の思出は永くわれをほゝえますであらう	405		首里	来沖。沖縄県女子師範学校・沖縄県立第一高等女学校の教諭として赴任(文部省からの出向命令は5月23日付)。
5					10月5日	26	今日は解剖図をかき乍ら先生の事を次から次へと考へた/やっばり私も不幸な人間なんだ	406		首里	
6				1922	2月	26	あんしもげすもくまにてむまからおれるへし/大清嘉靖[丁亥]7月25日	490		首里	
7					8月22日	26	訪問す/首里儀保町/長嶺華国翁	516		首里	兵役で6週間教職から離れた後、座間味家(首里士族)へ下宿。
8					8月25日	26	首里蓮池内弁財天堂を訪ふ/外に白地に宝字弁財天堂の額あり/室内は正面に黒塗の厨子あり	502		首里	末吉安恭と知遇を得る。末吉より米国帰りのアマチュアカメラマン、小橋川朝昇を紹介される。この頃伊波普猷、真境名安興、比嘉朝健とも知遇を得る。
9					9月21日	26	安里八幡を訪ふ	512		那覇	
10					10月20日	25	浮縄嶽 金曜日研究/位置 崇元寺前安里川二臨ム/大清嘉靖2年/己一鑑真和上研究	278	浮縄嶽なる名称/安里大親が縄を浮べて魚を釣りたる跡なりと伝ふ	那覇	
11				1923	2月7日	25	十時半 悲痛な日である。雨が降っている。昨晩は泥まみれな観音堂下の道路で手をとって泣いた涙がかれてみた…八重山丸は明日出るかでないかわからない	287		宮古島	女子師範学校の入学試験官として出張(2月7日-2月17日)。女子師範学校での最後の仕事。
12					2月11日	25	宮古着	287		宮古島(2月10日那覇発)	宮古方言の聞き取り調査
13					2月12日	25	七時半起床。	288		宮古島	
14					2月13日	25	潮満(スウムツ)	290		宮古島	
15					2月14日	25	宮古丸が沖にいてい泊してゐる。昨晩見えた燈もこれからだ。	292		宮古島	
16					2月15日	25	晴天/昨晩望月亭で酔ったので今朝は異様な感覚である 脳は刃/物のやうに冷刻である 然しふ透明でありまた把握力は確である/鼻骨は刺戟されて前歯は先端までするどくなつてゐるやうに思はれる[軽快なる精神作用は得られないが深刻に詳思しようと思つた。]天象と人間の諸活力との関係を考へ続けてゐる。	295		宮古島	

17				2月15日	25	午後2時/瀬水神社 本社は宮古の始祖姑依玉角姑依角2神を祀る此地/2神の天降り絵い霊地なるにより古来祥瑞1棟あり 日時平良、下地/砂川三間切之を保護す毎年1月藩主の萬寿を祈る 島民厚く信仰/し航海者旅人の信仰絶えず	296	宮古島	瀬水御嶽ほか
18				2月16日	25	北風強し	299	宮古島	
19				2月17日	25	午後3時平良発-八重山丸-/砂川冬さん 仲宗根幸さん 春ちゃん/それから3人の子供達/講習会に出てゐる女生徒達/みんなで棧橋迄或は本船まで見送って呉れ/ました 5時出帆 やがて沖で1時間余/滞泊	306	宮古島 発 八重山	
20				2月18日	25	午後7時石垣につく 譜久村トミさんが躍るやうにして迎へて呉れ/ました すぐ常緑旅館に到着	307	八重山	八重山方言の聞き取り調査
21				2月18日	25	登野城校にゆく	309	八重山	
22				2月18日	25	常緑旅館から由地旅館にひっこす 午後3時 譜久村さんと昼食してすぐ荷物を持って外に出る	309	八重山	
23				2月19日	25	夜 ちどりや	311	八重山	
24				2月20日	25	午後1時石垣の校長大浜氏に会った 島廳にゆく 昔の蔵元の地である/門の右側に大きな椰子の木(高さ2丈程) 左側にも人の背位の大きさの檳榔が生えてゐた。/この大きい方は蔵元時代からのものであらう。いろいろな歌に歌はれた蔵元の記念かと思ふとなつかしい…	316	八重山	大浜孫伴
25				2月21日	25	観音堂ノ仏像モ又スマシトリトノ噂ナリ	320	八重山	観音堂調査(石垣)
26				2月22日	25	桃林寺を訪ふ-字石垣285番地 岡本瓣山氏/玄關に梵鐘がある 割れてゐる、上部釣手の龍の彫刻は非常に面白いと思つた/琉球本島にある鐘と兄弟のものにして 尚泰久王景泰年間のものである。	323		桃林寺 (P323-326まで1923年2月22日の記録) 岡本瓣山
27				2月22日	25	桃林寺の岡本瓣山氏に伴はれて権現堂の前に来た、一見して先づ驚いた 私の心には/天久権現や識名八幡 冲宮等の建築に対する気持で満たされて/ゐた あの天久の獅子の彫像や柱陰の古面の彫像やらでその作品の羅列されてゐた私の観念の世界の前にこの八重山権現が現れた/のである。	324 - 325	八重山	桃林寺・権現堂
28				2月22日	25	夜 山城さんと南風原校長とが見えられた後黒島/直信さんのお宅へ行く 初めていゝ/歌に接した	326	八重山	大瀨用明・黒島直信・喜舎場用安・宮良安直
29				2月24日	25	土曜日 風強く小雨/8時頃 借りの雨合羽をきて桃林寺の門前に到着した 何だかもつたいい気がする。	335	八重山	
30				2月25日	25	月曜日 午前8時頃白保の喜舎場さんが見えた。/いろいろ話して一緒に桃寺に連れ立った。そして午後3時頃まで私/のためにいろいろと世話をやいて呉れた。	340	八重山	
31				2月25日	25	字、大川 崎山用宴氏 (29才) 写真師	340	八重山	
32				2月26日	25	夜、安室長智氏/入阿佐伊カイン (40) (字武富西村) /国吉カマト (29) (N-役所ノ前)	343	八重山	竹富島の方言調査

33				3月1日	25	終わり	359	権現堂創立ノ 建築家/大浜 家・喜友名家・ 久田ウシユウ マイ調査	八重山	No.72は八重山研究用資料 か
34				3月3日	25	16日祭/年中行事トシ墓参ヲヤル 昔ハコノ日1日ニ限ッテキタ 近年 は清明祭ニ而/行クヤウニナル 親類モ親シキコノ日ヤル 重箱モ 9種6種ノ肴/ヲ作りテ各墓ヲ巡リ 歩ルク	362			◆『沖縄タイムス』「先 嶋芸術と桃林寺の印象」 (1923年3月4日)
35				3月17日	25	大内原-常ノ御住ヒ所	378		首里	写真撮影
36				3月23日	25	卒業式 午後2時半から謝恩会 晩に泊から電車に乗った[Mさん にあひました]	378		那覇	写真撮影
37				3月24日	25	今朝はMさんがお友達と一緒に学 校に来られた、私はあひました。 たまらない気持ちがありました。 お別れして私は那覇の宮里さん の所へゆきました。	378		那覇	写真撮影
38				3月25日	25	円覚寺ノ鐘ヲ歌ヒタシ/日曜は裁 判所長(平良所長)/小橋川朝昇(朝 童さんの叔父さん)	379		首里	写真撮影
39				3月26日	25	月曜は 10時半頃ヨリハジム 首 里大宜味朝殿内所蔵	379		首里	写真撮影
40				3月27日 3月28日	25	尚順家訪問-神猫図ヲ見ル(9時-11 時マテ)予定である、三笑堂の図 ト類似マノ/見出されるが誰の筆 であるか不明ナリ 伊良皆筆 蘆雁之図/水鳥之図	379	尚順家(絵画 調査)	首里	写真撮影→小川写真館
41				3月29日	23	午前11時半/尚家にて/a.野国名馬 之図 b.清原氏女雪信筆 山水絵 巻 c.支那行列絵巻	380	尚家	首里	写真撮影・調査→cは宋 翰林画史張揮端が所画し たもの
42				4月1日	25	那覇市西本町5丁目5番地 宮里オ ミト氏/宮里家ニテ撮影 2時半 (興著温・慎思九ほかの作品) → 喜屋武直信(修通会)	380		那覇	写真撮影
43				4月3日	23	午後3時石門 小川写真館にて末 吉氏より拝聴す	34			
44				4月5日	23	首里市当蔵町2ノ22 伊江朝猷氏 /向元湖筆 肥後橋之図/自了筆 杉下三土囲碁之図	34		首里	
45				4月7日	23	那覇市役所 屋慶名筆 長嶺華国 氏談	35		那覇	
46				4月8日	23	慶良間(馬書山ト云フ)見(ケラ マミ)しがまち毛見(ゲーミー) らん	22		首里	
47				4月9日	25	午前8時半 島尻郡真和志間切宇 安里156番地 伊良皆チルー氏	381	婦郷直前の調 査(家譜書 写)。八重山・ オモロ・西表 その他	旧真和志	
48				4月18日	23	午後3時那覇出発す	29		那覇発(帰途)	
49				4月19日	23	午前7時半大島ナ瀬着/8時半同発。	29		奄美大島	
50				4月20日	23	午前7時半鹿児島着/午後1時5分 鹿児島発-第二師範着/午後9時-同 駅発-11時半鹿児島薩州館着	29		鹿児島	
51				4月21日	23	午前7時半鹿児島エキ着/大橋氏ト 共ニ牧野氏をおくる-17時55分同 発/午後5時1分日向高鍋エキ着/隈 工さんと父とに逢ふ	29		宮崎	
52				4月22日	23	日曜日終日休息	29			
53				4月23日	23	8時1分日向高鍋発/1時1分都城着/ 都城研究-3時半都城女学校着松崎 氏ニアフ/午後7時1分都城発	30	都城研究にう つる。源次郎 町通なる石標 の前に立ちて 偲む	宮崎	

